

[目次]

学会賞応募要領

第9回(2011年度)「生態学会賞」候補者推薦のお願い

第15回(2011年度)「日本生態学会宮地賞」候補者募集

第4回(2011年度)「日本生態学会大島賞」候補者募集

日本生態学会第58回大会案内 1

史上空前規模の東京大会レポート：お礼とメッセージ 5

記事

I. 定収入のない若手会員の学会費を学生会員と同額にします(要申請) 8

II. 役員(会長・全国委員)選挙と学会員名簿の電子化に関するアンケートについて 8

III. 全国委員会承認事項 8

IV. 書評依頼図書 8

V. 寄贈図書 9

VI. 後援・協賛 9

VII. 交換雑誌目録 9

お知らせ

1. 公募 9

2. 国立環境研究所公開シンポジウム2010 10

書評 10

公募カレンダー 17

京都大学生態学研究センターニュース 18

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。
会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

| | | A 会員 | B 会員 | C 会員 |
|--------------------|---------------------------|--------|--------|--------|
| 配布 * | Ecological Research + 生態誌 | ○ | ○ | |
| | 保全誌 | | ○ | ○ |
| 投稿 ** | 生態誌 | ○ | ○ | |
| | 保全誌 | ○ | ○ | ○ |
| 大会発表 | 全セッション | ○ | ○ | |
| | 自由集会 | ○ | ○ | ○ |
| 総会・委員 (選挙・被選挙権) | | ○ | ○ | ○ |
| 年会費 | 正会員 | 11,000 | 13,000 | 5,000 |
| | 学生会員 | 8,000 | 10,000 | 2,500 |
| | 団体会員 | 20,000 | 22,000 | 14,000 |

*Ecological Research および生態誌については冊子を必要としない会員への割引(ER 900 円、生態誌 600 円)を行っています。すでに会員の方が今後申請される場合は 2011 年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200 円 東北地区：800 円 関東地区：600 円 中部地区：0 円
近畿地区：400 円 中国・四国地区：400 円 九州地区：700 円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp

公 告

第 9 回（2011 年度）「日本生態学会賞」

候補者推薦のお願い

「日本生態学会賞」は、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。細則にありますように、受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

このたび、第 9 回の授賞に先立ち、会員の皆様に受賞候補者の推薦をお願いいたしたく存じます。この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、下記の要領で奮ってご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2010 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
中 静 透

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの推薦用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2010 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は全国委員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日改訂)

第9回（2011年度）「日本生態学会賞」 受賞候補者推薦用紙

日本生態学会賞選考委員会委員長殿

下記の者を、日本生態学会賞に推薦いたします。

2010年 月 日

推薦者氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 推薦理由

3. 主要な業績

切
り
取
り
線

公 告

第 15 回（2011 年度）「日本生態学会宮地賞」 候補者募集

「日本生態学会宮地賞」は生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。

会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、奮ってご応募、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2010 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
中 静 透

記

1. 受賞候補者の条件：本学会の若手会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの応募（推薦）用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会宮地賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2010 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

(1998年3月26日改訂)

(2000年3月10日改訂)

(2002年3月28日改訂)

(2006年3月24日改訂)

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日改訂)

第 15 回（2011 年度）「日本生態学会宮地賞」 受賞候補者応募（推薦）用紙

日本生態学会宮地賞選考委員会委員長殿

下記のごとく、日本生態学会宮地賞に応募（推薦）いたします。

2010 年 月 日

応募者（または推薦者）氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 応募（推薦）理由および研究内容

（生態学的位置づけも含め、なるべく具体的にお書き下さい。別紙添付可）

3. 業績目録（論文業績、学会等での研究発表などを重要と思われるものより順にお書き下さい）* A4 別紙添付すること。

4. 会員歴（学会入会年、学会での研究発表歴など）* A4 別紙添付すること。

5. 主要論文の別刷（5 編以内を添付願います）

公 告

第4回（2011年度）「日本生態学会大島賞」 候補者募集

「日本生態学会大島賞」は例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。

会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、奮ってご応募、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2010年4月1日
日本生態学会会長
中静 透

記

1. 受賞候補者の条件：本学会の中堅会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの応募（推薦）用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会大島賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2010年8月15日（必着）

以 上

日本生態学会大島賞細則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下大島賞という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日制定)

第4回（2011年度）「日本生態学会大島賞」 受賞候補者応募（推薦）用紙

日本生態学会大島賞選考委員会委員長殿

下記のごとく、日本生態学会大島賞に応募（推薦）いたします。

2009年 月 日

応募者（または推薦者）氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 応募（推薦）理由および研究内容

（生態学的位置づけも含め、なるべく具体的にお書き下さい。別紙添付可）

3. 業績目録（論文業績、学会等での研究発表などを重要と思われるものより順にお書き下さい）* A4別紙添付すること。

4. 会員歴（学会入会年、学会での研究発表歴など）* A4別紙添付すること。

5. 主要論文の別刷（5編以内を添付願います）

日本生態学会第 58 回大会案内

日本生態学会第 58 回大会（公式略称 ESJ58）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 060-0811 札幌市北区北 11 条西 10 丁目
北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター
日本生態学会第 58 回大会（ESJ58）実行委員会

担当：原登志彦（大会会長）、齊藤隆（大会実行委員長）

電子メール taikai@mail.esj.ne.jp

大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/58/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。

大会に関する最新情報は、ホームページで確認してください。

大会の概要

本大会では、公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会を行います。シンポジウムの開催形式、企画集会、自由集会につきましては、「**シンポジウム企画案の公募**」と「**企画集会と自由集会**」をご覧ください。シンポジウムと各種集会は、3月8日から12日の間に開催する予定です。

本大会は、日本生態学会員ではない方も参加できます。ただし、講演やシンポジウム等の企画提案をするには、日本生態学会員になっていただく必要があります（入会手続きについては <http://www.esj.ne.jp/esj/> を参照してください）。また、大会に参加するには、参加費を支払い、「大会規則」、「注意事項」等大会運営に関わる諸規定を遵守する必要があります。

会場・日程

本大会は札幌コンベンションセンターを会場として2011年3月8日（火）から12日（土）に開かれます。日程等の詳細は次号のニュースレターでお知らせします。

〒 003-0006 札幌市白石区東札幌 6 条 1 丁目 1-1
札幌コンベンションセンター URL:<http://www.sora-scc.jp>

公開講演会

日本生態学会第 14 回公開講演会を以下の要領で開催する予定です。

- ・講演会タイトル：「生態系を広く長く調べる：大規模長期研究への招待」
- ・日時：2011年3月12日（土）13:00～17:00
- ・会場：札幌コンベンションセンター
- ・内容の詳細については、次号のニュースレターで掲載いたします。

提案、申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切り予定は以下の通りです。シンポジウム企画提案は2010年6月7日（月）から受け付けます。他の申し込み開始は、締め切りの1ヶ月前程度から受付ける予定です。これらのスケジュールに変更がある場合もありますので、適宜、大会ホームページで確認してください。

シンポジウム企画提案、 2010年7月9日（金）17:00

企画集会申し込み、 2010年10月22日（金）17:00

自由集会申し込み、 2010年10月22日(金) 17:00
一般講演申し込み、 2010年11月12日(金) 17:00
講演要旨登録、 2011年1月11日(火) 17:00
プレゼンファイル登録、大会の数日前

期限までに発表用ファイルが提出されない場合は「発表はキャンセルされた」と見なされますのでご注意ください。

シンポジウム企画案の公募

第58回大会では、前回大会と同じ要領で、大会シンポジウムの**企画案**を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

- ・企画案は講演者が決まっていない Seeds 段階のものでもかまいません。
- ・海外研究者の招聘のリクエストも歓迎します。招聘費用を大会費用からまかなうことが出来る場合があります。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。
- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には**オーガナイザー**としての参加を要請します。オーガナイザーは日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります。
- ・大会企画委員会は**コーディネータ**を出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者(オーガナイザー)または講演者となることは出来ません。企画段階で重複が認められる場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。
- ・大会シンポジウムの企画は、2010年7月9日(金) 17:00 までに大会公式ホームページからご提案下さい。

企画集会と自由集会

第58回大会では、前回大会と同じ要領で、企画集会と自由集会所を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集され、受付後に企画者の希望を考慮し、大会企画委員会によって企画集会と自由集会に割り振られます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

企画集会

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められませんが**、原則として日程の調整は行いません。

自由集会

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められませんが**、原則として日程の調整は行いません。

企画集会自由集会ともに、企画者は C 会員を含む日本生態学会会員に限ります。

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2010年10月22日(金) 17:00 までに大会公式ホームペー

ジからお申し込みください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容を含むと判断されるものについては、その限りではありません。

企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。

提案された企画集会・自由集会の数が会場の収容可能数を上まわる場合には、同一会員が重複して複数の集会の企画者となっている提案からご遠慮いただきます。次に、大会シンポジウム企画者による提案にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、自由集会は抽選によって採否を決定します。

開催の可否については、11月19日（金）までにメールでご連絡します。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、**重複講演制限の対象となりません**。

一般講演

一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきますが、**新しい分野分けを現在、企画委員会で検討しています。「新分野分け」は決定次第ホームページでお知らせしますので適宜ホームページでご確認ください**。

注意：

- ・一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、**シンポジウムの企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）**。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承ください。

高校生ポスター発表

前回の大会に引き続き、高校生によるポスター発表を募集します。発表の申し込み方法につきましては、次号のニューズレターに掲載する予定です。高校生ポスター発表賞も設けますのでたくさんのご応募をお待ちしています。

ポスター賞

若手研究者を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニューズレターに掲載する予定です。

第57回の東京大会では過去最高の1009題のポスター講演が申し込まれ、会場の体育館は連日熱気に包まれました。今回から賞応募資格（過去のポスター賞受賞なし、または優秀賞1回まで、ポスドク2、3年目まで）を設けたものの、前回の盛岡大会とほぼ同数の534題が審査対象となりました。約130名の審査員のご協力のもと、101題（最優秀賞20題、優秀賞81題）にポスター賞を授与でき、これも数では過去最多記録、授与率でもここ

数年の最高となりました。高得点で僅差のポスターも分野によっては見受けられました。これほどの規模に内実ともに成長したことは喜ばしいことです。しかし、発表の場の時空間的制約や審査員の確保の難しさのなかでさらに制限を強化しなければならない時期にあることも確かです。これについては現在ポスター部会において議論中で、詳しくは9月のニュースレターで報告します。指導的立場にある会員の皆さまには、周囲の若手研究者に、ポスター発表だけでなく口頭発表などにも積極的に応募し経験を積むことを勧めてくださるようお願いいたします。

諸経費と納入方法

大会参加費、懇親会費などはこれまでの大会に準じた設定とする見込みです。諸経費の納入方法については、次号のニュースレターで詳しくお知らせします。

エコカップ 2011

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ 2011 が行われます。主催はエコカップ 2011 実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

史上空前規模の東京大会レポート：お礼とメッセージ

宮竹貴久（大会企画委員会前委員長）

なにもかもが予想を上回るスケールで催された第57回日本生態学会東京大会も大盛況のうちに無事に終えることができました。まずは大会企画委員会を代表してお礼を述べさせていただきます。細部では至らない点もあり参加者の皆様にご不便な思いをさせた部分もあったとは存じますが、過去最多参加者数となった盛大な大会を順調に成功させることができましたのは、まずは会員、参加者の皆様のご協力のお陰です。ありがとうございました。

渋谷から電車で2駅に位置する東京大学駒場キャンパスというアクセスの便利さもありましょうが、公式に登録が記録された参加者数は2,386人にも上りました。そのうち一般登録参加者は1,356人、学生登録参加者は1,030人でした。また本郷キャンパスで開催された公開講演会には790名の参加があり、その方々の多くは一般の方々でした。さらにポスター発表への高校生たちの参加者を含めると、大会を通しての総参加者は2,500人を優に超え、おそらく3,000人に近かったものとも思われます。その分、東京大学と首都大学東京を中心とした関東地区の会員で構成された大会実行委員会の準備のご苦労は大変なものだったと思います。東京大会は、当初は関東地区の大規模商業施設を借りて行う予定でした。しかし、会場賃貸費が高いなど生態学会を開催するにはいくつかの問題点があることがわかり、大会参加費を高額に設定しなければならないことがわかりました。そこで大会実行委員会の判断により、開催1年前に急遽、東京大学駒場キャンパスを主会場とした大会開催を決めました。参加人数の激増から受付や会場業務を業者に手伝わていただくことになりましたが、業者スタッフの人数は最小限に抑え、ほとんどの大会実務をボランティアの大会実行委員と学生アルバイトでまかなうことになりました。その分、会場賃貸費用をはじめとする諸経費を抑えることができ、大会参加費を大きく値下げすることができました。これもまた参加者数の増加につながったと考えられ、企画側としては大変嬉しい悲鳴となったのでした。

ご存じのとおり生態学会では、第52回の大阪大会から大会企画委員会が結成され、開催地区が組織する大会実行委員会と両輪の輪（和）を持って大会を支える体制を築いて来ました。大会企画委員会は50名のボランテ

ィアスタッフで組織されています。シンポジウム部会（シンポジウムのコーディネート業務、各種集会の会場割り振り）、ポスター部会（ポスター講演の割り振り、ポスター賞審査の段取り）、発表編成部会（口頭発表の順序と会場決め、プログラムの編成）、広報部会（広報活動、企業展示、書籍販売、広告協賛対応、マスコミ対応）、運営部会（登録受付、プログラム及び要旨集の編集・印刷など）の各部会に分かれて、大会実行委員会、及び学会本部と歩調を合わせ、開催一年以上前から東京大会に向けての準備を進めてきました。その間、準備に向けてメーリングリストで議論されたメールの数は1,500を超えました。集会のコマ数のはめ込み、ポスター展示の段取り、ポスター審査の段取り、プログラムの作成、講演要旨集の作成、諸委員会会場の手配、ウェブページの整備、学会本部との連携、託児所や昼食場所の確保など大会実行委員会との連携など、大局的なところから細部にわたる大会の運営方法について様々と議論し作業を進めてきました。また150件を超える大会ウェブページへの問い合わせにも委員会内で役割を分担し、その都度処理・対応してきました。

会員による集会等の企画意欲も大変目覚ましいものがあり、その結果、大会期間中に催された公式集会数の企画・応募は52件に達しました。そのうち大会シンポジウムは19件、フォーラムが3件、企画集会は31件であり、活発な研究成果の発表と討議が行われました。このほか15件の自由集会が開催されました。東京大会ではとくに今年秋に名古屋で開催されるCOP10との関連から、生物多様性に関する企画外の集会を、公式集会とは別に生物多様性関連集会と称して3件実施することができました。また大会最終日の3月20日には、生物多様性条約をテーマとした公開講演会「なぜ地球の生き物を守るのか？—生物多様性条約が守る自然の価値」も開催され、東京大学本郷キャンパスの安田講堂がほぼ満員となり、興味深い基調講演と活発な議論が行われました。これらも併せて生物多様性の重要性をより強く印象付けられる記念行事的な大会の色合いも出せたのではないかと思います。

釧路538、大阪538、新潟646、松山737、福岡931、盛岡862。これらの数字は、第51回釧路大会から昨年の盛岡大会までのポスター発表の数です。そして東京大

会、ポスター発表の数はついに千を超え 1,009 題と過去最大となりました。その結果、会場となった体育館は連日熱気に包まれました。会場が混雑しておりましたが、千を超えるポスターをうまくさばくことは至難の業でした。東京大会ではポスター発表の大幅な増加が予想されたため、事前に賞応募の資格を設けました。すなわち過去のポスター賞受賞なし、または優秀賞 1 回まで、ポスドク 2、3 年目までという制限を設けたのです。その制限にも関わらず、前回の盛岡大会とほぼ同数の 534 題のポスターが審査対象となりました。そのため、約 130 名の審査員のご協力のもと、101 題（最優秀賞 20 題、優秀賞 81 題）にポスター賞を授与でき、これも数では過去最高記録、授与率でもここ数年の最高となりました。高得点で僅差のポスターも分野によっては見受けられました。ポスター発表がこれほどの規模に内実ともに成長したことは喜ばしいことです。一方で、表彰などの準備に一部、配慮が行き届かなかった点があったことはお詫びいたします。今後の大会に向けては、発表の場の時空間的制約や審査員の確保の難しさのなかで、さらに制限を強化しなければならない時期にあることも確かです。これについては、現在ポスター部会において議論中で、詳しくは 9 月のニュースレターで報告できる予定です。指導的立場にある会員の皆さまには、周囲のポスドク以上の若手研究者に、口頭発表や各種集会での講演を勧めてくださいようお願いいたします。

また嶋田大会実行委員長の熱意にも後押しされた形で、今大会から高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」という新たな企画も行ないました。最初ほどのくらの応募があるのか不安でしたが、ふたを開けてみれば 29 題もの高校生による意欲あふれるポスター発表が行われ、高校生ポスター発表も審査員のご協力のもと表彰を行うことができました。高校生による発表は、マスコミの関心も高く注目を浴びましたし、何よりも高校生の生態学への熱意をエンカレッジすることができたと思います。

ポスター講演に加えて口頭発表にも 203 件の申し込みがあり、一般講演数の合計は 1,212 件に上りました。もしかすると空前絶後の規模の盛況な大会であったのかも知れません。いやいや今後、生態大会はますますその規模が大きく発展する可能性も秘めていますね。ちなみに一般口頭発表の数は、釧路 312、大阪 212、新潟 179、松山 171、福岡 238、盛岡 178 です。一方で、ポスター発表数の増加は、大きなポスター会場の確保の困難さ、多大な数の審査員の確保、審査結果の集計の手間が非常

に煩雑で大変であるなど、実務的に限界に近づいているところもあります。その半面、口頭発表会場では、ひとつの会場内において前後する講演内容の関連性が希薄になった箇所などもあったりして、すでに来年の札幌大会に向けた新大会企画委員会において、今後、どのようにこれらの問題を整理していくのかについて、議論が開始されています。

また東京大会においては、これまで大会実行委員に任せてきた広告およびマスコミへの学会の宣伝対策について、企画委員会に広報のセクションを設けて新たな取り組みを展開しました。そして過去の大会での広報の実績を集約し、より機能的に学会の広報を行うことができました。その成果のひとつとして、ランチョンセミナーの開催が実現でき、多数の参加者がお弁当を食べながら、学会誌への投稿、あるいは査読のテクニックを学べたのも有意義な機会になったと思います。そのほか、以前より懸案となっていました講演要旨集の紙媒体廃止に向けた第一歩の試みとして、今大会ではプログラムの表紙をカラー印刷にして充実させ、広告もプログラムに掲載しました。一方、講演要旨集は簡易なものにして販売することにしました。この改善点も参加費を安く抑えることには効果的でした。ただ盛岡大会の折に行ったアンケートの結果（詳細については、要旨集電子化のアンケート結果について http://www.esj.ne.jp/meeting/info/after_esj56.html#abst_book をご覧下さい）では、紙媒体の要旨集が必要と回答された方は 12.2%であったにもかかわらず、今大会では 705 部の要旨集が売れました。この数字のギャップをどう解釈するのかは今後の検討課題となりました。さらに実行委員会において、ネームタグ・ネームケース・領収書を一緒に同封して、委託業者が参加者に事前に届けるという工夫を施していただきました。また講演要旨集の配布も当日に受付とは別途に窓口を設け、迅速に参加者に配りました。これらの試みにより、これも従来の懸案事項であった大会当日の受け付け窓口の混雑が、かなり解消できたと思われます。

さて、以下のことは、2 年前の大会報告で当時の齊藤企画委員長がすでに述べられている内容ではありますが、改めて書かせていただきたいと思います。できることなら参加者個々の要望に丁寧に対応して大会を運営したい。しかし、そうは言っても 2,500 名を超える参加者の要望やご事情をすべてお聞きするのがどれほど大変なことかは想像いただけると思います。ボランティアによる、手作りで大規模の大会を運営するには省力化が不可欠であることを重ねてご理解いただきたいと思います。

大会運営の省力化を進め、運営を担当する会員の負担を減らすことは、将来、運営にかかわる可能性のある会員皆さんへの責任であると思います。このまま大会運営の負担が増え続けたならば、やがてボランティアによる運営は破綻し、強力なスポンサーでも付かない限りは、非常に高額な参加費の負担を参加者に余儀なくされるでしょう。

省力化に対処するためには、オンライン処理が欠かせません。送られてきた紙の申込書を見ながら手で入力するのではなく、申込み者がオンラインで申し込んだ情報をそのままサーバ上に保存し、これを一括して自動処理することで、大幅な省力が実現されているのはご承知のことと存じます。このシステムの構築もすべてボランティアによって行われています。しかし登録などを締め切ってから、作った印刷原稿にあとから変更を加えるのは手作業になってしまいます。大規模情報を一括処理できるシステムも、手作業が一件加わることで、たちまち非常に面倒な作業を強いられることになってしまいます。それも何箇所も、プログラム、要旨集、参加者リスト、ウェブ掲載情報などで不整合が生じないように気をつけながら修正する作業は、とても神経を使う大変な作業です。省力化のためだけでなく、ミスの混入を避けるという点からも、手作業の修正は極力避けたいところです。

諸事情により登録の締め切りに間に合わなかった会員のなかには非情に感じられる会員の方もいるかもしれませんが、繰り返し「締め切り厳守をお願いする理由」(詳しくは大会ホームページ http://www.esj.ne.jp/meeting/info/why_so_inflexible.html) をご覧ください、と申し上げます。皆さんのなかには、生態学会の会員であり大会参加費も支払っているのだからサービスを受ける権利があるのは当たり前というお考えもあるかも知れませんが、大会はビジネスで運営しているわけではありません。大会を運営しているのは参加者の皆さんと同じふうの会員のボランティアです。毎年、大会報告に書かせていただいていることではありますが、改めてご理解のほどよろしく願いいたします。

今後、大会の規模が大きくなるにつれて、ポスター発表の形態はこのままで良いのか？ スケジュールにもっと工夫はできないのか？ 集会の持ち方にもっと可変性が認められても良いのではないのか？ など様々な意見が企画委員会内でも飛び交い、今も議論が続けているところです。会員の皆さまからの新しいアイデアや自由な発想は大歓迎ですし、真摯に検討させていただきたいと思います。ただし、それを実際に運営する場合に、プ

ログラムや集会の持ち方のどれひとつでも変更すると、様々なほかのセクションに影響が及んでしまいます。慎重に運営を改善していくことが肝要です。大会企画委員会では、会員の皆様からいただいた新しいアイデアも積極的に考慮し、実際の運営との整合性を考えた上で、時代の流れにフィットした大会企画を今後とも実現してゆきたいと考えています。また会員の皆さんに、どうぞ積極的に大会の企画・運営に参加していただきたい。より多くの会員が大会の運営に関わるからこそ、大会のより一層の充実、そして日本生態学会のさらなる発展につながると思います。

1年間、取りまとめ役をやらせていただき、常に悩んだことがあります。参加者からのいろいろなご要望、問い合わせがあります。できる限り、個別のご希望を聞いてあげたい。しかし、誰かの希望を聞いたために、全体のバランスが崩れて、別の方のご希望には添えないことに結果的になってしまうこともあります。それは会員内にとっても不公平感を産んでしまうこととなります。たとえば、発表数がどんどん増えている中で、発表の重複制限についても議論がありますが、どなたかの希望を聞くことで、正直者がバカを見るという事態は絶対にあってはなりません。一年間、常に頭を悩ませた結果、結局、常にルールに従うしかないという結論に至ります。なぜ私の希望は聞いていただけないのか？ 理不尽な思いをされた方もあると思います。その際には、平にご容赦いただきたいと思います。ルールはまだまだ完璧ではありませんし、学会の形態が時代の流れと共に変化し、よりその時代、時代にあった学会の活性化を考えるためには、ルール自体も変えていく必要があります。これからも参加者の皆さんの希望に添えるようなきっちりとしたルール作りを目指してゆきたいと考えています。すでにそのような議論は、今日もメール上で活発に検討されていることをご承知置きください。

それにしても、参加者2,500名を超える学会大会の準備が、普段は大学や研究機関で勤務されているボランティアの人たちですべてまかなわれているというのは、改めてとても奇跡的なことのようにわたしには思えます。その裏方には、何名もの方々の、普通では考えられないような、生態学会に対する熱い想いに支えられた奉仕活動が続けられていることを、皆さんにどうかご理解いただきたいと思います。

大会企画委員会は、大手信人新委員長のもとで4月から新任期を迎えています。東京大会の成果と課題を受けて、まずは札幌大会のさらなる成功、そして将来に向け、

生態学会の伝統である研究者個々人の自由な学問への思いを大切にしつつ、なおかつ今後ますます重要になる社会への生態学・環境学からの貢献を達成できるよりよい大会の実現を目指して、日々検討を深めて参りますので、どうぞよろしく願いいたします。

記 事

I. 定収入のない若手会員の学会費を学生会員と同額にします（要申請）

2010年3月の東京大会総会にて、定収入のない若手会員の学会費を学生会員と同額にすることについての提案が決議されました。

[趣旨]

若手研究者の就職は生態学会にとって大きな問題だが、期限付きの職にも就くことができず、収入がかなり低い若手会員は少なくない。

そのような会員にとって、学会費の負担はかなり重いものであるとの声も寄せられている。若手支援の1つとして、そのような会員の学会費を学生会員と同額とする。

[内容]

- ・期限付きの職にもついておらず年収200万円以下で40歳未満（会費年度の1月1日現在）の会員について、翌年の会費を学生会員と同額にする。
- ・10月末日までに、収入に関する書式と申請書を提出した、滞納のない会員の翌年の会費について適用する（毎年、申請が必要）。
- ・収入の証明に付いては、指導教員あるいはそれに準じる人が署名した書式でよいものとするが、公的な収入証明でもかまわない。
- ・2011年度の会費から実施する。

* 詳細については日本生態学会HP (<http://www.esj.ne.jp/>) にて案内します。

II. 役員（会長・全国委員）選挙と学会員名簿の電子化に関するアンケートについて

常任委員会と事務局では、選挙と名簿について電子化の可能性を検討しています。電子化する際に、選挙においては、有権者の投票の自由と秘密が守られることが大切です。また、名簿については迷惑行為に利用されないことを考えておく必要があります。電子化について検討するにあたって、まず、会員のみなさんのご意見を聞くため、アンケートを行うこととしました。現在は、選挙：2年に一度、会長・全国委員の選挙を郵送により実施。有権者である会員に投票用紙や会員のリストなどを郵送し、会員からの投票も用紙を事務局あて郵送（料金受取人払い）によっている。

名簿：3年に一度、会員に情報を問い合わせ、冊子を作成して全会員に配布している。

実施の際には、事務局よりメールにてアンケート情報をお知らせいたしますので、メールアドレスの登録をされていない会員の方は、kaiin@mail.esj.ne.jp までお知らせ

ください。

III. 全国委員会承認事項

1. 第8回日本生態学会功労賞
松本 忠夫（放送大学教養部）
2. 次期 Ecological Research 編集長
（任期：2011年1月～2013年12月）
可知 直毅（首都大学東京）
3. 次期日本生態学会誌編集長
（任期：2011年1月～2013年12月）
鈴木 英治（鹿児島大学）

IV. 書評依頼図書（2009年9月～2010年4月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 日本土壤肥料学会編「土壌の原生生物・線虫群集」(2009) 174pp. 博友社 ISBN:978-4-8268-0212-3
2. 速水格著「古生物学」(2009) 216pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062716-0
3. 樋口広芳・黒沢令子編著「鳥の自然史【空間分布をめぐって】」(2009) 258pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8191-1
4. 大井徹著「ツキノワグマ」(2009) 248pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01854-4
5. 宮内泰介著「半栽培の環境社会学 これからの人と自然」(2009) 262pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-0934-9
6. 池谷和信編「地球環境史からの問い」(2009) 367pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-023856-4
7. 大串隆之・近藤倫生・難波利幸編「群集生態学シリーズ3 生物間ネットワークを紐とく」(2009) 332pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-345-2
8. 豊国秀夫編「復刻・拡大版 植物学ラテン語辞典」(2009) 388pp. ぎょうせい ISBN:978-4-324-08862-3
9. 鬼頭秀一・福永真弓編「環境倫理学」(2009) 290pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062311-7
10. 川井唯史・高畑雅一編著「ザリガニの生物学」(2010) 556pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8194-2
11. 川上洋一著「絶滅危惧の生き物観察ガイド東日本編」(2009) 160pp. 東京堂出版 ISBN:978-4-490-20676-0
12. 川上洋一著「絶滅危惧の生き物観察ガイド西日本編」(2010) 160pp. 東京堂出版 ISBN:978-4-490-20677-7
13. 江口英輔・蟻川謙太郎編「色々な感覚の世界 超感覚の仕組みを探る」(2010) 144pp. 学会出版センター ISBN:978-4-7622-3061-5
14. 野島利彰著「狩猟の文化 ドイツ語圏を中心として」(2010) 412pp. 春風社 ISBN:978-4-86110-210-3
15. 和田英太郎・神松幸弘編「安定同位体というメガネ人と環境のつながりを診る」(2010) 174pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-1017-8

16. 池田和信編「日本列島の野生生物と人」(2010) 332pp. 世界思想社 ISBN:978-4-7907-1471-2
17. 鷺谷いづみ著「にっぽん自然再生紀行」(2010) 118pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-029569-7
18. 鷺谷いづみ・宮下直・西廣淳・角谷拓編「保全生態学の技法 調査・研究・実践マニュアル」(2010) 330pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062219-6

V. 寄贈図書

1. 「うみうし通信 No.65」(2009) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
2. 「第 59 回 東レ科学振興会科学講演会記録」(2009) 40pp. 財団法人東レ科学振興会
3. 「こうえいフォーラム 第 18 号」(2009) 130pp. 日本工営株式会社技術委員会
4. 「果樹研究所ニュース No.22」(2010) 12pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所
5. 「学術会議叢書 16 食の安全を求めて」(2010) 150pp. 財団法人日本学術協力財団
6. 「多摩川 第 125 号」(2010) 20pp. (財)とうきゅう環境浄化財団
7. 「INTERNATIONAL COSMOS PRIZE 2009」(2010) 64pp. 財団法人国際花と緑の博覧会協会
8. 「日本化学工業協会研究支援自主活動 Annual Report2008」(2009) 74pp. 社団法人日本化学工業協会
9. 「国際シンポジウム 2009 報告書」(2009) 262pp. 兵庫教育大学 教育・社会調査研究センター
10. 「東邦大学 『生命の科学で未来をつなぐ女性研究者への継続的支援モデル』平成 21 年度活動報告書」(2009) 210pp. 東邦大学 男女共同参画推進室
11. 「SESSILE ORGANISMS 第 27 巻 第 1 号」(2010) 72pp. 日本付着生物学学会
12. 「果樹研究所研究報告 第 10 号」(2010) 96pp. 果樹研究所
13. 「うみうし通信 No.66」(2010) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
14. 「Journal of Environmental Information Science Vol.38, No.5」(2010) 110pp. 社団法人環境情報科学センター
15. 「みどりいし 21」(2010) 42pp. 財団法人熱帯海洋生態研究進行財団

VI. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 第 13 回マリンバイオテクノロジー学会大会
期日：平成 22 年 5 月 29 日 - 30 日
会場：広島大学東広島キャンパス生物生産学部 C 棟
2. 横浜国立大学グローバル COE プログラム「アジアの視点の国際生態リスクマネジメント」シンポジウム「-生態リスク管理の実践-若手研究者による挑戦の軌跡-」
日時：2010 年 3 月 10 日

- 場所：横浜国立大学教育文化ホール大集会室
3. 国際ワークショップ「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ～ COP10 名古屋に向けて～」
日時：2010 年 5 月 13 - 14 日
場所：名古屋国際会議場・白鳥ホール
4. COP10 PreConference
日時：2010 年 3 月 21 - 23 日
場所：名古屋大学
5. 京都大学国際シンポジウム「生物多様性と動物園・水族館」
日時：2010 年 9 月 19 - 20 日
場所：名古屋港湾会館新館
6. 先進陸水海洋学会日本生態学会大会
日時：2012 年 7 月 8 - 13 日
場所：滋賀県大津市

VII. 交換雑誌目録 (2009 年 4 月現在)

1. Acta Zoologica Fennica
2. adansonia
3. Annales Botanici Fennici
4. Archiv fur Molluskenkunde
5. Biodiversity Science
6. BREVIORA
7. Chinese Journal of Applied Ecology
8. Chinese Journal of Ecology
9. Entomologische Berichten
10. EXPLORATIONS
11. Folia Geobotanica
12. Journal of Plant Ecology
13. Journal of Taiwan Fisheries Research
14. Memoranda
15. MICRONESICA
16. ORSIS
17. Polish Journal of Ecology
18. Proceeding of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia
19. Scientia Marina
20. Senckenbergiana Biologica
21. Sichuan Alpine Ecology Study
22. SPIXIANA
23. Systematics and biodiversity
24. The BIOLOGICAL BULLETIN
25. The Botanical Review
26. Tropical Ecology
27. ВЕСЦі АКДЭМ ІІ НАВУК ВЕЛАРУС І
28. ЗКОЛОГИЯ
29. Хабарлары Цэвесмця

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②

助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 中山科学振興財団平成 22 年度褒賞・助成事業

- ①本年度テーマは「森林の人間科学」
- ②大賞:300 万円 (1 名) 奨励賞:100 万円 (1 名) 研究助成:50-200 万円 (若干名) 国際交流助成:海外渡航助成 10-50 万円 (若干名) 海外研究者受入助成 10-50 万円 (若干名)
- ③平成 22 年 6 月 15 日 (必着)
- ④〒 113-8666 東京都文京区白山 1-25-14 (株) 中山書店内 (財) 中山科学振興財団
TEL 03-5804-2911 FAX 03-5804-2912

(2) 2010 年度信州フィールド科学賞

- ①山岳地域におけるフィールド・ワークを基本として研究している若手研究者 (2010 年度末で 35 才以下) を対象とします。研究対象や分野は問いません。
- ②毎年度 1 名。賞状および副賞 20 万円を贈呈。
- ③2010 年 6 月 30 日 (必着)
- ④信州大学山岳科学総合研究所運営支援チーム
〒 390-8621 松本市旭 3-1-1
電話:0263-37-2432 FAX:0263-37-2438

(3) 住友財団 2010 年度 基礎科学研究助成

- ①理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの(それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む)
- ②総額 1 億 6,000 万円
1 件当たりの助成額 最大 500 万円 (100 件程度)
- ③データ送信の締切 2010 年 6 月 23 日 (水) 必着
郵送書類の締切 2010 年 6 月 30 日 (水) 必着
- ④〒 105-0012 東京都港区芝大門 1-12-16 住友芝大門ビル 2 号館
公益財団法人 住友財団 (担当 中山)
TEL 03-5473-0161 FAX 03-5473-8471
E-mail:sumitomo-found@msj.biglobe.ne.jp
URL:http://www.sumitomo.or.jp/

(4) 住友財団 2010 年度 環境研究助成

- ①一般研究:環境に関する研究全般(分野は問いません)
課題研究:募集課題「共通する環境問題解決のための国際共同研究」
- ②総額 1 億 1,000 万円
1 件当たり 一般研究 最大 500 万円 (50 件程度)
課題研究 最大 1,000 万円 (2 件)
- ③データ送信の締切 2010 年 6 月 23 日 (水) 必着
郵送書類の締切 2010 年 6 月 30 日 (水) 必着
- ④〒 105-0012 東京都港区芝大門 1-12-16 住友芝大門ビル 2 号館
公益財団法人 住友財団 (担当 新山)
TEL 03-5473-0161 FAX 03-5473-8471
E-mail:sumitomo-found@msj.biglobe.ne.jp
URL:http://www.sumitomo.or.jp/

(5) 第 2 回 (平成 22 年度) とうきゅう環境浄化財団社会貢献学術賞

- ①日本の環境分野において学術的、社会的に特に顕著な業績を挙げた研究者
- ②賞状および賞金 50 万円
- ③応募期間:平成 22 年 6 月 1 日～8 月 31 日
- ④日本生態学会 (学会推薦が必要です)

(6) 第 49 回下中科学研究助成

- ①全国小・中・高校・中等教育学校・特別支援学校・高等専門学校の教員を対象とし、研究は個人であると共同であることを問いません。
- ②1 件当たり 30 万円。総額 900 万円
- ③平成 22 年 12 月 10 日
- ④〒 162-0843 東京都新宿区市谷田町 2-7 伊東ハイム 301
財団法人下中記念財団『下中科学研究助成金』係
電話:03-5261-5688 Fax:03-3266-0352

2. 「国立環境研究所 公開シンポジウム 2010」

テーマ:4 つの目で見守る生物多様性

ー長い目、宙(そら)の目、ミクロの目、心の目ー

【東京会場】平成 22 年 6 月 19 日 (土) 12:00 ~ 17:00

九段会館ホール (千代田区九段南 1-6-5)

【京都会場】平成 22 年 6 月 26 日 (土) 12:00 ~ 17:00

シルクホール (京都市下京区四条室町東入ル 京都産業会館 8 階)

【内 容】

生物多様性とは何か、その背景にある進化の歴史、人間とのかかわり、そして現在の状況といった背景を踏まえて、生態系と生物を見守る当研究所の活動のうちから、(1)長い目でじっくりと見る(長期のモニタリング)(2)空から広い範囲を見る(リモートセンシング)(3)遺伝子などミクロの手がかりを利用して見る(遺伝子解析)(4)統計的な処理やシミュレーション計算を活用する(統計・モデル解析)といったさまざまなアプローチをご紹介します。また、生物多様性と関連するテーマについて、来場者の皆様と対話をしながら研究者が成果を説明するポスターセッション(13 件)を予定しています。

【問い合わせ先】

国立環境研究所公開シンポジウム 2010 登録事務局

〒 171-0042 東京都豊島区高松 1-11-16

株式会社ステージ内 (担当:亀井、橋口)

Tel: 03-5966-5784 Fax: 03-5966-5773

E-mail: info_nies2010@stage.ac

書 評

「ニカメイガー日本の応用昆虫学一」(2009) 桐谷圭治・田付貞洋編 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-0760028-7 本体価格 7000 円

本書は「はじめに」によれば、「ニカメイガを材料に

して、分類、行動、生活史、個体群動態、害虫管理、発生予察、生物的防除、フェロモン利用、耐虫性品種、作付け体系と発生理、殺虫剤抵抗性、光周期と休眠、季節適応と地理的変異、生態型、種分化、耐寒・耐凍性、栄養生理、変態の内分泌制御など、応用昆虫学のみならず昆虫学のすべてが語られている。」といった内容の本である。ニカメイガの幼虫のことをニカメイチュウと呼ぶが、それは稲作害虫としてかつてウンカ類と双璧をなしていた大害虫である。だからこそ、わが国の応用昆虫学者はその防除のために基礎から応用までのさまざまな側面や興味から研究を展開してきた。本書はこのような多様な研究の集大成としてまとめられたものである。

本書はプロローグに始まり、I 個体群動態と発生予察、II IPM とその展開、III 生態現象の生理的機構と続き、エピローグで終わっている。それぞれの部がさらに多くの章からなり、総勢 43 名からなる執筆者により分担されている。このことは、ニカメイガに対する防除がいかにも多くの昆虫学者あるいは応用昆虫学者を動員した至上課題であったことを示唆している。

現在では幸いなことにニカメイガはきわめて発生の少ないマイナー害虫になってしまっている。「昆虫学者の涙ぐましい努力の甲斐があって」と書きたいところであるが、実はそうではない。戦後に導入されたさまざまな米増産技術が図らずして耕種的要因になり、結果としてニカメイガの広域的な害虫管理につながったものと考えられている。耕種的要因の例を挙げれば、1955 年に導入された早期栽培、1960 年に導入された中生稲の収穫期の 2 - 3 週間の早期化、1965 年に導入されたコンバイン収穫機と稲藁の焼却、1970 年に導入された機械植えと農薬の苗箱施用などである。これらはいずれも、世代や季節は異なるが、幼虫の生存にとって不利な状況をもたらしたのである。このことは、応用昆虫学者にとってある意味でとても皮肉な現象である。だからと言って、これまで積み重ねられてきた膨大な研究は、直接的には防除に結びつかない、無駄な研究であったという理由で、今流行の言葉を使えば、応用昆虫学者の研究は「仕分け」の対象になるのであろうか。もちろんそうではない。ニカメイガに関する研究は今後の害虫防除一般に対して多大な示唆を提供するという重要な役割を果たしたものと評価されるのである。そのいくつかを挙げてみよう。

第二次世界大戦後、マラリア蔓延予防に使用されていた有機塩素系殺虫剤の DDT などの化学合成殺虫剤が大々的に使用されるようになったが、DDT と同じ有機塩素系の BHC がニカメイチュウに使用された。それは粉剤という形で使用された。確かに卓効があったものの、ターゲットとなる害虫だけでなく天敵であるクモ類にも効き目があり、その捕食圧から開放された結果、それまで害虫ではなかったツマグロヨコバイが密度を高め、害虫化してしまった。この虫はイネ萎縮病を媒介することで問題になっている。このような現象は生態的誘導多発生（エコロジカルリサージェンス）としてよく知られている。それでは体に直接付着しない粒剤であればクモ類には効かないだろうと、今度は BHC 粒剤を散布した。しかし、それでもクモ類は減少した。粒剤であってもイ

ネの根から吸収された成分を吸汁してしまったツマグロヨコバイを今度はクモが捕食することで、やはりクモは死亡したのである。食物連鎖という生態学の原理が働いたためである。このような応用昆虫学上の歴史は、生態学的な原理を無視した害虫防除がいかにも持続的なものになりえないかを如実に示すよい教訓になったと言える。

害虫防除にかかわるもう一つの教訓として、ニカメイガに対して戦前に行われた寄生蜂を用いた生物的防除法がある。海外からの侵入害虫に対してその地域から天敵を導入して防除するという方策は古典的生物防除法としてよく知られているが、ニカメイガという土着害虫に対してフィリピンからメアカタゴバチを導入して、放飼するという奇妙なことが行われたのである。それは失敗したのであるが、その理由が、海外から導入したはずのメアカタゴバチが実はわが国の土着種であっただけでなく、その本来の生息場所が水田ではなく畑地であったというから、失敗すべくして失敗したものと言えよう。次に試みられたのが、ズイムシアカタゴバチという寄生蜂を利用した生物的防除法であった。放飼試験は、寄生蜂を 1 ヘクタール換算で 1600 万から 1 億 6000 万頭も放飼するというすさまじいものであったが、放飼の効果は一時的で、持続せずに、失敗に終わった。寄生率を高めようと大量に放飼したことにより、過寄生が起こり、体サイズが小型化し、産卵能力が低下したり、発育途中で死亡したりしたのである。結果として、それは天敵の生物農薬的利用の可能性を検証するための実験となったのであるが、必ずしもうまく行かないことを、そのメカニズムとともに示したものとして、やはり貴重な応用昆虫学上の教訓となったのである。このあたりのいきさつと厳密な検証については、広瀬義躬氏による第 7 章の「天敵と生物的防除」に詳しく記述されている。

さて、ニカメイガは今でこそイネの害虫になっているが、もともとはイネではなくマコモを寄主植物としていたと考えられている。わが国で稲作が普及する前から、彼らはマコモを寄主とする“ただの虫”として低湿地に生息していたのである。第 5 章「マコモ寄生とイネ寄生」で、田付貞洋氏は、マコモ個体群からイネ個体群がどのように分化成立したのかについての興味深いシナリオを描いているが、その直接のきっかけは雌の産卵選好性のわずかな変異であったという。イネに産卵された卵から孵化した幼虫は、前適応としてイネを食うことができ、イネのフェノロジーに同調した「2 化」や移動性を進化させたと考えられている。さらに天敵の少ない人工生態系である水田への適応として、交尾時間が早まり、そのことはもとの個体群との障壁となり、より分化を促進した。また、イネという茎の細い食草の利用や水田という二次元的に広い空間への進出は、体サイズの小型化、雌をして高濃度の性フェロモンの放出、雄をして高感度の感覚器の発達を促したという。産卵選好性のわずかな変異がその後の寄主植物個体群間の大きな違いにつながっていくというシナリオは、ニカメイガの起源と進化を考える上で重要であるばかりでなく、進化生態学的にもまことに興味深いものである。

本書の編者の一人は、わが国における総合的害虫管理、

近年では総合的生物多様性管理の提唱者である桐谷圭治氏であるが、氏が担当した3章のうちの1章である第6章の「個体群動態—大発生と潜在的害虫化」は、ニカメイガの発生の経緯をその要因とともに振り返り、それを戦術的IPMと戦略的IPM、さらにはIBM（総合的生物多様性管理）という基本的概念に照らし合わせて総括し、かつ未来へ向けての展望を行ったものである。ここではニカメイガは、地域によっては絶滅危惧種として位置づけられ、それは保護すべき対象となっている。かつて米の増産のために防除すべき大害虫として見なしていた大方の研究者からすれば、それはまさしく隔世の感があるに違いない。

しかし、これからもそのような状況が続くと考えることは、いささか早計であるかも知れない。世界の最大の米生産地帯である揚子江デルタ地帯では、ニカメイガ、サンカメイガ、イネヨトウといったイネメイチュウ類の被害がこれまでにないほど拡大してきているという（第16章「未来に向けて」参照）。国家的要請である多収性のハイブリッドイネ（茎が太く窒素含有量が高い）の栽培に加えて、薬剤抵抗性の発達、地球温暖化による越冬幼虫の生存率の向上などが総合的に働いた結果であるとみなされている。第11章「生活環の地理的変異」を担当した岸野賢一氏も、地球温暖化による気温の上昇が、発育や休眠に関する生理的性質の変化を通した生活環の再構築をもたらし、近い将来、多発生につながる可能性が高まるのではと警告している。さらに、第14章「休眠と耐寒性」を担当した積木久明・後藤三千代両氏も、地球温暖化が急激に進行しているなかで、それぞれの地域に適応した昆虫を含む生物たちにおいて、今後どのような性質が進化し、淘汰されるのか、あるいはどのような種が発展し、滅亡するのかなど、種の存立の予測と対策が地球規模で求められていることを強調している。

戦略的IPMとは、広域的かつ中・長期的なスケールで考えたIPMのことである。土地利用の変化、栽培システムの変遷、気候温暖化といった長期的な環境変動は、害虫に対する戦略的IPMを構築していく上で、必要不可欠な要素となるに違いない。害虫防除の戦略は生態系が変動するものであることを前提として構築されなければならない。ニカメイチュウに関する応用昆虫学の歴史は、このことを考察する上で有益な示唆を与えるものと考えられる。

（京都大学大学院農学研究科 藤崎憲治）

「シリーズ群集生物学2 進化生物学からせまる」(2009)
大申隆之・近藤倫生・吉田丈人編 京都大学学術出版会

—群集生物学と進化生物学の

学問的融合の意義と今後の展望—

本稿で評する『シリーズ群集生物学2 進化生物学からせまる』は、生物群集におけるパターンとそれを生み出す機構の解明を目指す学問分野である「群集生物学」と、生物学の一分野で共通祖先からの種の起源、進化、生物多様性などに関して包括的研究を行う学問分野である「進化生物学」との、学問上における「融合」を論じ

た貴重な書である。本巻に参加している研究者はみな、広義の「生物学者 (biologist)」であるが、各々はその下位分野において異なる専門領域を有しており、それは翻って本巻を、「群集生物学」と「進化生物学」の学問的融合に関する、多角的な視点からの考察を可能にしている。詳細な書評の前に簡潔ながら、本巻の内容を説明するとまず初めに、「これまでの群集生物学では、生物の環境変化に対する可塑的な反応や進化が生物群集に果たす役割については、十分に引き上げられてこなかった (p. v.)」と、過去から現代にわたり「群集生物学」が抱えている研究課題に関して問題提起がなされ、次に、この問題提起に対して各々の生物学者らにより種々の分野・方法論（統計・数理分析など）により、それへの回答がなされる。そして最後に結論として、「群集生物学」が解き明かす種々の現象（相互作用・個体群動態・群集構成など）は、「進化生物学」の知見である「適応」を考慮に入れなければ理解が難しい (p. 263.)、と研究上の困難性を指摘し、ここで明らかにされた「群集生物学」と「進化生物学」間の深淵な相互関係の全体像に関する解明が、今後の群集生物学における大きな課題であると括られている。

本書評では紙面の都合上、各章に関する詳細な書評は差し控えるがその代わり、「群集生物学」と「進化生物学」の学問上の融合を論じる際に不可欠な概念である、「適応のタイム・スパン（短いスケール・長いスケール）」および「生物群集」と「適応」間の因果関係に焦点を当てて、それを行うことにする。具体的な流れとしては、まず本巻各章の要約を行いその上で、将来の研究課題に関して本巻の内容と関連させつつ、評者の見地より、多少のコメントを付すことで、本巻を評することにする。

まず、各章内容の説明であるがこの「群集生物学」と「進化生物学」の融合というはじまったばかりの研究の理解には、本巻冒頭に記載されている以下の二次元の空間図が有用であろう (p. vi.)。

各章の内容は、適応の時間スケールを表した軸と生物群集と適応の因果関係を表した軸をもつ二次元空間に分類できる。本巻のテーマである群集生態学と進化生物学の統合的な理解は今後取り組むべき重要な課題であると認識されつつある。

上記のように各章の内容は視覚的に把握可能であるが、本巻の具体的構成は以下の章立てとなっている。

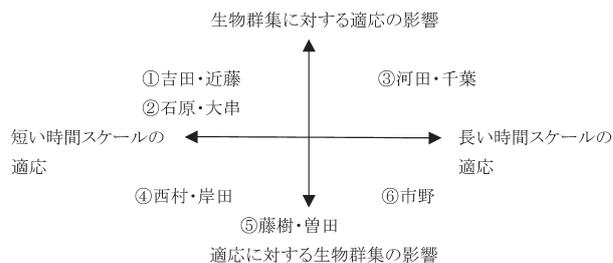


図1 各章の位置づけ

| | |
|-------|---|
| 第一章 | 適応による形質の変化が個体群と群集の動態に影響する (吉田丈人・近藤倫生) |
| 第二章 | 適応と生物群集を結ぶ間接相互作用 (石原道博・大串隆之) |
| 第三章 | 生物群集を形作る進化の歴史 (河田雅圭・千葉聡) |
| 第四章 | 多種系における表現型可塑性 (西村欣也・岸田治) |
| 第五章 | 共進化の地理的モザイクと生物群集 (東樹宏和・曾田貞滋) |
| 第六章 | 生物群集の進化—系統学的アプローチ (市野隆雄) |
| コラム 1 | 生態ゲノミクス—適応・群集研究への新たなアプローチ (清水健太郎・竹井やよい) |
| コラム 2 | 群集生態モデルと進化動態—資源分割理論を例に (佐々木顕) |

本巻では、上記の章立てにより、「群集生物学」と「進化生物学」の融合に関して論じられるがその具体的内容は以下のように要約可能である。

まず第一章、第二章においては、吉田、近藤、石原、大串が、生物群集の構造・動態・表現型変化の、密接な相互関係を説明している。生物種の形態・行動・生活史などの形質は、表現型可塑性・迅速的進化など変化のダイナミクスを通して、生物間相互作用およびそれらの環境への関わりの変化へ寄与する。第一章では、適応による生物間相互作用の改変が個体群動態に与える影響を解説される。第二章では、第三者を媒介する間接的效果に焦点が当てられ、間接的相互作用の生物適応に対する変化および生物群集への波及に関しての説明が試みられている。

第三章においては、ニッチ分化など生物群集における適応過程を通して新たな種が形成され、それらの蓄積により生物多様性が創出されることが多様な視角より説明されている。本章では、群集構造と系統的・進化的制約に関してニッチ分化および種分化率に焦点を当て説明がなされた後、大規模イベントである大量絶滅・絶滅の選択性・群集の復帰過程、さらには現代における絶滅とその生物群集への影響に関して考察が加えられている。

第四章では、生物群集中に見られる多様な相互作用においては、群集構成種へのさまざまな淘汰圧が、表現型の可塑的反応・遺伝的組成の変化を伴う変化の誘因となることが説明されている。本章においてはまず、先行研究では生物適応に関して強い相互作用で結合された二種の生物が対象とされてきたと述べた後、二種の生物間相互作用によって創出される表現型可塑性の事例紹介がなされる。

第五章では、東樹・曾田によって、生物群集が生み出す淘汰圧が時間のみならず、空間的にも変化しうること、進化の地理的変異・自然淘汰の地理的モザイク、進化と群集構造、移動分散と群集レベルでみた共進化、といった視点より説明が行われる。そして結論として、二つの次元における変化の重要性が主張される。すなわち、生物群集構造の「場所的変化」は自然淘汰形式の変化へ、

自然淘汰のモザイク構造としての「空間的変化」は生物の共進化を通して生物群集の生物地理学的パターンの創出へ、寄与するのである。

第六章ではまず、分子系統樹を利用した近年の研究は、革新的な生態形質を獲得した系統群が古い形質をもつ系統群に比べて急速に分化・多様化してきたことを明らかにしている、先行研究の状況説明がなされる。その上で著者は、群集の進化を、多様化率の系統間相違の繁栄である進化的推移であると述べ、多種の淘汰圧や自然淘汰の空間的変異 (モザイク構造) は、種分化を初めとする大進化にも影響し、それにより創造される新しい相互作用が、生物群集中における「敵対的現象」にとどまらず、共生関係・社会的協力といった「利他的現象」の創造にも寄与すると主張する。

最後に、本巻で言及されている将来の研究課題と関連させた上で、評者の見地より本書に関して、二点コメントを付した上で本巻の書評を終えたい。

第一に、本巻でも指摘されているように (p. 267.)、適応の影響と多様な相互作用の関係に関する内容に関しては、さらなる研究が必要である。確かに、「消費」の相互作用と適応との関係に関しては、先行研究においても充実しているが、表現型可塑性・迅速的進化の相互作用と適応との関連に関する研究例は希少であり、これらが今後の相互作用への適応の影響に関する、研究課題となっていくであろう。

第二に、多種系の動態への適応の影響である。この問題の核心は、理論仮説構築と実証研究実施の間に介在するトレード・オフの関係にある。すなわち、理論的進展を求めるならば、より多数の種間 (既存の研究は少数種でのそれに限定されていた) において観察される適応による相互作用と個体群動態の解明が必要になるが、一方、実証研究においては、観察種数の増加に伴う研究精度の低下が不可避である。このように、多種系の動態への適応に関する研究の進展には、方法論的困難が不可避に付随する。それゆえ、多数種からなる生物群集においてそれぞれの種に見られる適応が群集全体にどのような影響を与えるか、についての分析は今後、群集生物学における一つの研究課題として残るであろうと思われる。

以上、簡潔ながら、『シリーズ群集生物学 2 進化生物学からせまる』を評した。「生態学という劇場で演じられる進化という劇」の解明は困難な事業であるが、本巻はそれに対して一つの道筋を提示したという点で、生物学を学ぶ全ての研究者にとり必読の書であるといえよう。

参考文献

- Chesson, P. (2000) Mechanism of maintenance of species diversity. *Annual Review of Ecology and Systematics*, 31: 343-366.
- Hutchinson, G. E. (1965) *The Ecological Theater and the Evolutionary Play*. Yale University Press, New Haven, USA.
- Johnson, M. T. J. and Stinchcombe, J. R. (2007) An emerging synthesis between community ecology and evolutionary biology. *Trends in Ecology and Evolution*, 22: 250-257.

Maynard Smith, J. (1986) *The Problems of Biology*. Oxford University Press, Oxford, UK.

Willson, E. O. (1992) *The Diversity of Life*. Harvard University Press, Cambridge, USA.

(慶應義塾大学国際変動研究所 伊藤隆太)

「ニホンカワウソ―絶滅に学ぶ保全生物学」(2008) 安藤元一著 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060189-4 本体価格 4400 円

この書評の本文前半はイタチ類の動物医学を卒論課題とする学部生が、また後半を当該学生の指導教員(すなわち、私)が追加・補完する方法を撰った。変則的でも学部生の消化不良的な文案に戸惑われるかも知れないが、これも教育活動の一つ。御容赦賜りたい。(文責 浅川)

ニホンカワウソとこれに近縁な動物たちを様々な視点から眺めつつ、保全生態学の基本を学ぶもので次の6章で構成されていた(カギ括弧に各章題を示し、要約とコメントをした)。「ニホンカワウソと人間の関係史」: 縄文以降のカワウソとヒトとの関わりについて、食肉・漢方薬、毛皮、害獣、飼養の面から解説。家畜(ウシ、ウマ、ニワトリ)と比べたら史料は少ないであろうが、カッパ民話との関連性などは非常に興味深かった。「カワウソという生きもの」: カワウソ類全般の形態・分類・生態についての解説。小型化した耳介、扁平な頭部、密で撥水性を有する体毛、短い四肢、手指間の蹼など潜水に適した体型を具体的に理解させる記述であった。カワウソ類は鼻鏡など形態から分類されてきたが、DNAの塩基配列も併用されている。これは他の動物を対象にした分類(学)と一緒にであるが、ニホンカワウソの場合、このような遺伝子解析が一般的になる前に姿を消してしまったので、各地に残された剥製標本を用いるという。当然、困難な作業となるが、やっと得られた遺伝子配列も独立種なのかどうか未決。研究の厳しさを実感した。章後半の行動圏・様式、生息数・密度、餌資源、育児・成長は、動物医学含むどのような研究する上でも基本情報となろう。私は北海道に暮らすのでラッコの現状については、より有益であった。「日本のカワウソ」: 前述のように江戸時代までは何千年も続いてきたニホンカワウソとの関係は、狩猟が無法的な状態になった明治時代以降、急変し、富山・北海道などにおける激減、個体数急減により大正時代には見せ物興業のネタになったという。そして、昭和半ばには本州・北海道からほぼ同時に姿を消していく。それに対抗するかのよう、愛媛と高知では保護施策がとられた。結局、ニホンカワウソは絶滅してしまうが、その克明な記録は、将来、有益な情報になろう。「韓国のカワウソ」: 前述のように日本では残念な結果であったが、その頃の韓国では、まだ(ユーラシア)カワウソが人々の近くに生息していた。この章は日本の轍を踏まないように願った活動の紹介である。韓国メディアや研究者の反応など大変興味深いものであった。「世界のカワウソ保全活動」: 世界各国における様々なカワウソ保全の教育・啓発活動が記された。

原則的にはこれまでの独自文化(カワウソ漁など)を活用することが、結局、多くの協力が得られるという。ドイツは成功国の一つであるが、この経験をアマゾン産オオカワウソ保全にも応用するなど日本との違いを見せつけられた。「再導入を考える」: 再導入には個体数を増加させる直接的なもの、戻って来やすい環境再生を行う間接的なものの二つに分けられる。この二つのアプローチを軸に、再導入の目的や生物多様性維持について解説された。要は人間にもメリットがなければ、保全施策(ここでは再導入)は決して成功しないことがよく理解できた。評者は、これまでただ単に「どうやって再導入するのか」という技術にのみ目がいったが、「いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ再導入をするのか」ということを事前に厳密に検討する必要性がよく判った。(文責 橋本)

「環境省佐渡トキ保護センター順化ケージにテン侵入、トキ捕食」, 「ラッコ食害により歯舞漁協のウニ全滅」。どちらも本書評作成の佳境にあった2010年3月11日の北海道新聞朝刊に掲載された記事の主題である。在来のカワウソは姿を消しても、類縁者は存在感を日本人に強く印象付けているようだ。特に、ウニ食害報道は、北海道では大問題で、愛らしいラッコの姿と食い散らかされたウニ殻の大写真が第一面を飾った。が、(道内新聞購読者約7割の)一般の方々は、どれほどこの動物達のことを知っているのであろう。エキゾチック・ペットか動物園動物の専門医を目指すため、獣医大に入学した学生(しかも、フェレットを飼育する専門課程真っ直中の学部4年生)ですら、前述のように本書で扱っている基本情報をご存じ無かった。その空隙を本書が埋めてくれたので、指導教員(私)としては安堵している。それはともかく、現在、日本語で読むことができるイタチ類の最良の参考書であることは間違いない。が、寄生虫学/野生動物医学の専門家として、少しだけコメントさせて頂く。p117に「(北海道以外のカワウソについて)科学的な調査は行われないうまま終わった」とあるが、1972年、高知県中村市(現、四万十市)の海岸で発見された死体については詳細な寄生虫学的な検査が行われ、その結果、鉤頭虫が得られた(Machida, 1973)。ただし、この鉤頭虫は、本来、ゴンズイのような魚を終宿主とする種であったことから、擬寄生現象(件カワウソの腸管腔内で餌となった魚の食渣の一部として発見されただけ)と解されたが、いずれにせよ、解剖にあたった町田昌昭博士は、当時、国立科学博物館の学芸員(現、目黒寄生虫館館長)、しかも獣医師の有資格者であった。したがって、「獣医師は関与しなかった」という記述も誤りとなる。この原著論文を検索・ヒットさせるのは酷だと思われるかも知れない。されど、10年ほど前刊行された書籍(亀谷ら, 1999)で(しかも、同書中に収められた二つの総説)も引用されているので、どこかで引っ掛かったと思う。だが、それでも哺乳類学を専攻する方に巡り会うのは難しいかも知れない。本書で紹介された欧米の専門家のように、研究活動を展開しつつ優れた啓発・教育活動を展開する姿勢は、我々(寄生虫学者)も学ぶべきと痛感した。

なお、(査読後受理された) 科学論文は研究の根幹をなす活動であり、啓発・教育活動ではない。p169で「啓発・教育活動」の具体的な11の項目として、2番目に(ちなみに、1番目は「対話」、3番目は「講演」)「科学論文刊行と新聞への寄稿」が掲げられていた。また、科学論文刊行が(同じ活字が並んだ媒体であっても)新聞記事と同列的に扱われたことも、明らかに誤解を招く。この部分は海外の事例紹介をただけなので、本著者の責任ではないかも知れないが、どこかでフォローして欲しかった。おっと、「そのくらは、自分でやりなさい!」という声がどこからともなく……。野生動物医学にあって不動態は最重要事項の一つである。したがって、もはや定番となった麻酔薬のコンビネーション、「ケタミン・ドミトール」のカワウソ野生個体への禁忌(p192)は、是非、引用文献を付けてもう少し詳しく解説して欲しかった。もう一つ、この分野に関わり保全施策にも強い悪影響を与える疾病(特に感染症)のコントロールについても、「保全」あるいは「再導入」のどちらかの章で盛り込んで頂きたかった。たとえば、都市排水に含まれるトキソプラズマ原虫が、米国沿岸の多数のラッコに感染、致死性脳炎を惹起したことなど、いまやかなりよく知られている。おや、またまた聞こえた。「だから、自分でやり!」(文責 浅川)

文献

- Machida, M. 1973. *Heterosentis plotosi* (Acanthocephala: Arhythmacanthidae) from Japanese otter. Res. Bull. Meguro Parasitol. Mus. (7): 24-25.
- 亀谷了・大鶴正満・林 滋生(監). 1999. 日本における寄生虫学の研究. 第6巻, 目黒寄生虫館, 東京: pp. 672.
- (酪農学園大学 獣医学部 野生動物医学センター 橋本幸江・浅川満彦)

「稚魚 生残と変態の生理生態学」(2009) 田中克・田川正朋・中山耕至著 京都大学学術出版会 387pp. ISBN:978-4-87698-774-0 本体価格 3,800 円

本書は、著者らの言う“先に著者らが編者として2008年に出版した稚魚研究の各論編的な「稚魚学 多様な生理生態を探る」に続く総論的なもの”である。

水中を泳ぐ魚の自然の生活を目にする機会は通常は無いか、よほど特殊な条件の下でしかないはずである。一方、魚の成魚に見られる回遊、成熟などの季節にまつわる情報は食卓に上る旬の味といった経験則から日本人にとって馴染みが深い。

しかし巷の店頭を賑わしているチリメンジャコもしくはシラスさらに煮干について、それらはカタクタイワシで、魚の卵にしては一風変わった楕円形の卵から孵化して仔魚(プランクトン型幼生)から自立的に生活する稚魚へと変態を遂げるという生理生態の側面や小卵多産の生き残り戦略といった資源生態にどれだけの人が思いを馳せるであろうか。

前書では、わが国の栽培漁業などで多くの魚種を対象とした人工孵化、育成技術の知見が蓄積され、その恵ま

れた先進的土壌を背景に研究された成果のみならず、それぞれの稚魚に魅せられた40余名ものわが国研究者のそれぞれの研究現場における真摯な姿を投影し、稚魚学としてのこれからを論じている。

そのコンセプトを本書でも根幹としているが、魚類の初期生活史が知られているのは世界で100~200種程度といわれているうち、研究の進んでいる130種にものぼる内外の事例を折込み、仔稚魚たちの生理を凝視し生態の解明に迫る実学の姿勢が平易な筆致と話題性に富んだ内容によって、さらに魅力あるものとなっている。

本書の構成は大きく三部にまとめられ体系化されている。冒頭では、同じ脊椎動物でありながら陸上の哺乳類は勿論、他の動物とも一線を画した魚達の発育初期の生残りと変態の諸相を紹介し、その生育環境、回遊、移動などの生態のみならず稚魚の採集手法にも論及。次いで摂食と被食にまつわる栄養、共食、天敵、個性、学習、適応などの生理生態事例に加えて分子分析手法による魚種の同定、安定同位対比の応用による種間関係の解明、さらに多獲魚種マイワシの資源変動、魚種交代現象など初期減耗との関連に及ぶ。最後に著者らは、養殖漁業、栽培漁業にかかわる課題から天然魚と人工飼育魚の形態や質の相違、地球温暖化問題と稚魚研究の役割、また砂浜域消失やマングローブの荒廃を取り上げ、その事態の重大さを“稚魚たちの叫び”と言って説く。

終章では、著者らが提唱し深く関わっている森里海(もりさとうみ)連環学を紹介し、その海域陸域統合管理理論に基づく“森の再生は仔稚魚の再生”であり、基本的に長期的な取り組みとして問題提起をしている。究極的に海の植物プランクトン生産力の回復なしには稚魚達は“幸福”になれないし、漁業生産の向上もあり得ないと言うフィールドの総合研究としての発想は、仔稚魚研究にとっての課題でもあり展望につながると主張する。

さらに著者らの辿った稚魚研究活動を通じて腰を据えて科学する視点、随所に専門用語の説明を加えながらの記述と挿入された9編ものColumnの内容は本書が広く啓発の書であることは見てとれる。

とかくグローバルな視点での理論構築などに目を奪われるこの頃である。本書によって稚魚学を目指す若い学徒は勿論、他分野の生態研究者のみならず一般の読者をも魅了するであろう小さな生命のドラマ、仔稚魚の謎の一端が開かれ分かりやすく体系付けられたことの意義は大きい。更なる研究の展開と実学としての成熟により、今なお多くの多くの謎に満ちた扉が遠からず開かれるとの期待をも抱かされる。(鈴木秀彌)

崎尾 均 編(2009)「ニセアカシアの生態学：外来樹の歴史・利用・生態とその管理」335pp. 文一総合出版 本体価格 3800 円 ISBN:978-4-8299-1073-3

ニセアカシアは、日本人が馴染み深く利用してきた代表的な外来の樹木である。近年では要注意外来生物に指定され、地域によっては駆除も行われているが、歴史的には養蜂や緑化などに日本人が必要として導入し、その時代の期待に応えてくれた樹木である。このためニセア

カシアの生態は、その導入の歴史や日本人の生活との関係を除いては語ることでできないものである。本書は、こうしたニセアカシアの歴史的・社会的な動向と、外来植物であるニセアカシアの特性という両視点から、「ニセアカシアの生態学」としてまとめられている。

本書は、第1部でニセアカシアの導入と利用の歴史について、第2部ではニセアカシアの種特性について紹介され、第3部でニセアカシアの管理について具体的な方法が紹介されている。利用の現場や生態学的な研究、管理による実践などの幅広い分野で、ニセアカシアに関わってきた28名の著者が参加している。ニセアカシアの問題に対する意見や今後の管理に関する方向性は一つではなく、本書でも著者により異なる見解が示され、これに関しては編者の崎尾均博士も、今後の課題である旨を述べている。何よりも、ニセアカシアに関する問題が、ニセアカシアの科学的事実に基づいて、よりよい方向に発展していくことを願ってまとめられた書籍だと思う。

第1部「ニセアカシアの利用の歴史」：第1－5章からなり、ニセアカシアが日本に導入された社会的背景と利用の歴史が紹介され、ニセアカシアと日本人の関わりを理解するための重要な導入になっている。戦後の荒地における緑化樹木としての価値、養蜂における蜜源植物としての価値、また現在では木材利用としての価値があり、その歴史と現在の問題が各現場の声によりまとめられている。第一部では、ニセアカシアの問題を通して、外来生物を利用した産業の今後の方向性を根底から検討しなければならないことを、改めて認識させられる。生態学の研究対象としてみているだけでは漠然としかわからなかったこと、しかし日本人の生活に根ざしているニセアカシアの問題とそれに対する意見がまとめられてあり、必読である。

第2部「ニセアカシアの生態」：第6－15章からなり、幅広い専門分野におけるニセアカシアの生態に関するこれまでの研究成果が集約されている。各章は科学的なデータに基づいて、未発表データや、今後の課題も含めてまとめられている。埋土種子の特性、種子の越冬と発芽特性から始まり、河川攪乱と実生による発芽および定着、海岸林におけるクローン個体群の拡大、光合成特性、伐採に対する萌芽力、ニセアカシア人工林の多様性、ニセアカシアの遺伝子の多様性、ニセアカシア落葉が溪流生態系へ与える影響、アレロパシーの効果などが、各章でまとめられている。各章は各専門分野の研究者が担当しているので、その分野でのニセアカシアに関する最前線の情報が圧縮されている。調査手法は野外での調査から実験的な手法、ニセアカシアの個体を扱うものから遺伝子や化学物質を扱うものなど、アプローチの手法も多岐にわたる。第2部は多くの研究者によりまとめられたことによって、ニセアカシアの生態を、生活史を通して理解できるようになっている。

第3部「ニセアカシアの管理」：第16－20章で、ニセアカシアの管理に関する実践的な取り組みが紹介されている。衛星画像を利用したニセアカシアの分布を把握する手法の開発や、ニセアカシアの伐採・伐根により在来の河川敷植生を復元する取り組み、ニセアカシアの伐

採により在来樹木の更新を促す管理、薬剤を利用したニセアカシアの除去の取り組みがある。伐採や薬剤を利用した管理方法に関しては、具体的な方法とニセアカシアの反応が示されており、管理を必要とする場合に活用できるかたちでまとめられている。また、ニセアカシア林を維持するための管理方法も紹介され、ここではニセアカシア林の維持と駆除の相反する方法が取り上げられている。今後の管理方法については、どちらの方法を選ぶのか、またどのような将来の森林の姿を描くのか、問いかけられるかたちで締められている。

本書のおわりでは、これからのニセアカシア林の管理に関して、生態系から除去すること、養蜂業の蜜源や木材生産として利用していくという、相反する方向性が考えられること、そして、その方向性の決定には、流域や地域ごとに社会的な合意が大切になることが述べられている。

外来生物の管理は、対象種の特性を十分に理解した上で、科学的なデータに基づいて、冷静に、計画的に行うことが肝心である。繁殖力の強い外来生物をこれ以上導入しないようにすることが重要ではあるが、すでに定着している外来生物について、要注意外来生物や特定外来生物に指定することは容易ではなく、また、指定により現場に混乱を招く可能性もある。このため、外来生物対策に関わる行政や現場の関係者は、対象種に関する科学的な知見だけではなく、適切な管理方法を必要としている。本書は、対象種が社会的にどのように必要とされ、利用されているのかを理解すること、そして、その種の生態的特性に関する知見を集積し、それに基づいた管理方法を提案することの重要性を示していると思う。今後も、ニセアカシアに限らず多くの種について、種特性とそれに基づいた管理方法が連鎖するかたちで研究成果が公開されていってほしいと思う。

ニセアカシアの外来生物としての問題を認識していても、「この樹に何の罪があるというのか」という気持ちは多くの関係者が抱くのではないだろうか。外来生物の問題は、それを利用する産業や、政策と密接に関連している。本書は全てを読んだ最後に、外来種であるから除去するという一方からの考えだけではなく、歴史的な関わりを理解した上で今後の方向性を決定する必要があることを改めて認識させてくれる。本書を通して、ニセアカシアの問題を通して、第二のニセアカシアをつくらないために、多くの関係者が外来生物の問題に関心を持つ機会になってくれればと思う。本書は、ニセアカシアに関する書籍であるが、ニセアカシアに限らず外来生物対策に取り組む一助となる書籍である。外来生物の取り扱いに関して政策的な課題になっていることが多いことから、研究分野だけではなく、外来生物対策に関わる行政の方にもお薦めしたい。

(国土交通省国土技術政策総合研究所 久保満佐子)

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

| 名称又は種類 | 授賞又は助成団体 | 2009年締切 (*印：2010年締切) |
|-------------|--|-------------------------|
| 研究助成 | 財団法人 とうきゅう環境浄化財団 http://home.q07.itscom.net/tokyuev | 1月15日* |
| 藤原賞 | 財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp | 1月31日* |
| 自然科学研究助成 | 財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp | 3月10日* |
| コスモス国際賞 | 花の万博記念コスモス国際賞委員会 | 4月1日* |
| 環境問題研究助成 | 財団法人 日本生命財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp | 4月12日* |
| 長期自主研究 | 社団法人 日本化学工業協会 http://www.j-lri.org/ | 4月30日* |
| 研究助成 | 公益信託 ミキモト海洋生態研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp/ | 5月7日* |
| 研究助成 | 公益信託 四方記念地球環境保全研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp/ | 5月7日* |
| 研究助成 | 公益信託 増進会自然環境保全研究活動助成基金 http://www.jwrc.or.jp/ | 5月7日* |
| 国際生物学賞 | 日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-bionom.htm | 5月14日* |
| 研究助成 | 公益信託 富士フィルム・グリーンファンド http://www.jwrc.or.jp/ | 5月17日* |
| 日本学術振興会賞 | 独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/ | 5月21日* |
| 文部科学大臣表彰顕彰 | 文部科学省研究振興局 http://www.mext.go.jp/boshu/index.htm | 7月17日 |
| 研究調査助成 | 財団法人 日本証券奨学財団 http://www.jssf.or.jp | 8月7日 |
| 社会貢献学術賞 | 財団法人 とうきゅう環境浄化財団 http://home.q07.itscom.net/tokyuev | 8月31日* |
| 朝日賞 | 財団法人 朝日新聞文化財団 | 8月31日 |
| 学術研究助成 | 藤原ナチュラルヒストリー振興財団 http://fujiwara-nh.or.jp/ | 9月1日 |
| 日産科学賞 | 財団法人 日産科学振興財団 http://www.nissan-zaidan.or.jp | 9月15日 |
| 調査研究・技術開発助成 | 海洋博覧会記念公園管理財団 http://www.kaiyouhaku.jp | 9月30日 |
| 記念基金助成 | 日本万国博覧会記念機構 http://fond.expo70.or.jp/valuation/explanation.html | 9月30日 |
| 沖縄研究奨励賞 | 沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/ | 9月30日 |
| 木原記念財団学術賞 | 木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp | 9月30日 |
| 科学技術賞 | 東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html | 10月8日* |
| 研究助成 | 東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html | 10月8日* |
| 尾瀬賞 | 財団法人 尾瀬保護財団 http://www.oze-fnd.or.jp/ | 10月31日 |
| 学術研究助成 | 財団法人 アサヒビール学術振興財団 http://www.asahibeer.co.jp/crs/philanthropy/ab-academic/index.html | 11月5日 |
| 研究助成 | 財団法人 鹿島学術振興財団 http://www.kajima-f.or.jp/ | 11月20日 |
| 助成事業 | 財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 http://www.expo90.jp/ | 11月25日 |
| 研究助成 | 財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/ | 12月10日* |
| 高木仁三郎市民科学基金 | 特定非営利活動法人 高木仁三郎市民科学基金 http://www.takagifund.org | 12月10日 |

Center for Ecological Research NEWS



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

共同利用・共同研究のお知らせ

京都大学生態学研究センターは、生態学に関する共同研究を推進する全国共同利用施設として機能してきましたが、2010 年度（平成 22 年度）から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として新たに発足しました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や、研究集会・ワークショップなどの公募を行っています。詳しくはセンターの HP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/cooperative/index.html>) をご参照ください。なお、2010 年度の公募は、2010 年 5 月 7 日で締め切りました。

センター関係者の動き

- 1) 藤田 昇准教授が、3 月 31 日付けで退職されました。
- 2) 技術職員の小島 巖氏が 3 月 31 日付けで退職されました。
- 3) 石田 厚氏が 4 月 1 日付けで（独）森林総合研究所よりセンターの教授として着任しました。
- 4) 荒木希和子氏、小林 豊氏、竹内 剛氏が、4 月 1 日付けで研究員（研究機関）（任期 1 年）として採用されました。
- 5) 吉浪理美氏が、4 月 1 日付けで技術職員として着任しました。
- 6) 2010 年度外国人研究員（客員教授）として、トリノ大学（イタリア）の Massimo Maffei 氏が 4 月 1 日から 6 月 30 日までの予定で滞在中です。
- 7) 塩尻かおり氏が、5 月 1 日付けで京都大学次世代研究者育成センターの特定助教として、当センターで研究を開始しました。